

環境教育への取り組み方の一考察

科学技術教育部 理科教育係 春日 芳 則

1 はじめに

環境教育のねらいは、1991年3月文部省の発行した「環境教育指導資料」によると、「環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上に立って環境の保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力、判断力を身に付け、よりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動が取れる態度を育成する」とある。

この目標が示すとおり、環境教育はよりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動が取れてはじめて意味を持つものである。

本センターでの環境教育講座の研究協議の中で、環境教育を実践する上での問題点として、「環境教育の体系的なとらえ方がわからない」「環境教育のすすめ方がわからない」等があげられた。

そこで本研究では、児童・生徒の環境問題に関する意識と行動のアンケート調査を基に、環境教育の取り組み方について考察をした。

2 環境に関する児童・生徒の意識と行動調査

環境への責任ある行動へ結びつく要因として、「ゴミの分別収集」など環境問題についてどの程度知っているかをみる「環境に関する知識（調査1）」、自然への感受性につながると考えられる

「小川や田んぼに入る」「井戸水やわき水を飲む」などの「自然体験（調査2）」、「使っていない部屋の電気を消す」などの環境を意識した行動をどの程度とっているかをみる「環境に配慮した生活体験（調査3）」についてアンケート調査をした。

調査対象は、調査項目の内容と学年発達による比較の必要性の両面を考慮し、県内各地の小学校5年生、中学校2年生とした。得られたサンプルは小学校5年生167名、中学校2年生552名である。調査の方法は、それぞれ3つの選択肢で回答を求めた。

3 アンケート結果と考察

アンケート結果を調査1～調査3のグラフで表した。

また小学校5年生、中学校2年生のそれぞれの平均の割合も同時に折れ線グラフで同一グラフ上に表した。

(1) 環境に関する知識（調査1）

9項目すべてにおいて「知っている」または「聞いたことがある」が50%を越えた。項目別では「リサイクル運動」「エコマーク」など、生活に関連した項目が高い割合を占め、「地球温暖化」「海洋汚染」など地球規模の環境問題が下位を占